

# 英国における知的障害者の支援

— スポーツと性教育の視点から —

宮崎 伸一  
斎藤 利之

## 1. はじめに

我々は、知的障害者の支援を考える際に、本報に先立ち、豪州の現状を、スポーツおよび性教育の2点から調査し報告をした（論文投稿中）。その中で、豪州のスポーツにおいては、多くの知的障害者にスポーツを行うことができる機会を提供し、スポーツを始めた彼らが、その後どのような競技会に出場でき、どのようにすれば国際試合に出場できる可能性があるのか（いわゆる pathway）が明確に示されている点を特徴としてあげた。また、豪州の性教育においては、地域と学校を対象とした性教育を、知的障害者を含め、すべての人々が等しく享受されるべきとの考えのもとに40年間運営されている組織を例示し、その平等性は、先住民族に敬意を払い、民族の多様性、セクシュアリティの多様性を尊重する考えに広がり、そこから必然的に性の平等という感情が生まれてくる可能性を指摘した。このような豪州の取り組みは、そのまま日本に導入するには、マンパワー等の点で難しいものの、大いに参考になると考えられた。

本報では、近代障害者スポーツの発祥の地であり、2012年にパラリンピックを開催してその影響（いわゆるレガシー）が残っているはずの英国を対象とし、知的障害者スポーツの現状を調査することとした。また、英国の性教育の現状に関しては、我々が知る限り文献としての報告がみられないため、同国で知的障害者に対する性教育の現状を調査した。本報では、スポーツと性教育の視点から英国における知的障害者の支援の現状を報告する。

## 2. 障害者スポーツの歴史と英国の関わり

英国の現状報告の前に、競技性の高い障害者スポーツの歴史と英国の関わりに関してその概要を、著者らの研究班からの報告の一部を抜粋して述べていく<sup>1)</sup>。

「パラリンピック競技大会は、第二次世界大戦で脊髄損傷を負った退役兵を対象として、1948年にイギリス、ストークマンデビル病院内において開催されたストークマンデビル競技大会が起源である。同大会は、1952年にオランダ選手団が参加し国際大会へと発展し、1960年に初めてオリンピック開催地と同都市であるローマで開催され、後に第1回パラリンピック競技大会とされた。(中略)1996年のアトランタ大会では知的障害が包括されている。(中略)知的障害者を対象としたスポーツ団体は、1968年に国際スペシャルオリンピックス<sup>註1)</sup>(以下、SOI)が設立されたことが始まりである。(中略)知的障害者を対象とした新たなスポーツ団体として、1986年にInternational Sports Federation for Persons with Mental Handicap(国際知的障害者スポーツ連盟、以下、INAS-FMH)がオランダで発足した。INAS-FMHは(中略)1989年のIPC(International Paralympic Committee:国際パラリンピック委員会)設立のメンバーでもある。INAS-FMHは、知的障害者アスリートにおける競技志向のニーズに応え、1992年のバルセロナパラリンピック競技大会と同時期に「知的障害者のパラリンピック競技大会」をマドリードで開催し、74か国から約1,400名のアスリートが参加した。INAS-FMHは、後にINAS-FID(International Sports Federation for Persons with Intellectual Disability)、現在はINAS(International Federation for Athletes with Intellectual Impairments)<sup>註2)</sup>と改名し(中略)「知的障害者のパラリンピック競技大会」を経て、知的障害者アスリートは、夏季パラリンピック競技大会(1996, 2000)、冬季パラリンピック競技大会(1992, 1994, 1998)に包括されてきた。しかし、2000年に開催されたシドニー大会では、男子バスケットボール競技において金メダルを獲得したスペイン代表チームメンバーの大半が健常者であったことが判明し、IPCは、確固たるクラス分けシステムが確立するまでの間、知的障害を対象とした競技種目についてパラリンピック競技大会から除外することとした(中略)そしてロンドン大会では、陸上、水泳、卓球において知的障害者アスリートの競技種目が開催され、リオ大会にも引き継がれている。(後略)」

このように、英国は現在隆盛をみているパラリンピックの原点であり、また一時パラリンピックに参加できなかった知的障害者が復帰した地でもあるのである。競技性の高い知的障害者スポーツの国際的なスポーツ団体としてはINASが重要である。一時INASの事務局がロンド

ンに置かれていて、ロンドンパラリンピックに復帰時の代表は英国人であったことなど、英国との関係は深い。

さて、英国の障害者のスポーツ環境については、笹川スポーツ財団による大部の報告書がある<sup>2)</sup>。この報告書によれば、INASと直接関係する英国の国内団体はMencapである<sup>3)</sup>。Mencapは、'Mencap Sports'という部門で知的障害者のためのスポーツ支援を行っているが、それ以外に、知的障害者本人、その家族、ケア担当者を対象にさまざまな支援を行っており、同所のスポーツ担当者、および性教育担当者から情報を収集することとした。

### 3. 調査期間および調査方法

2018年9月10日、ロンドンでMencapの所員に非構造化インタビューを実施し、組織の運営方針や現在行っている諸活動などについて情報を収集した。聴取対象者は、エリートスポーツ担当者（Mathew Maguire氏）1名および性教育・渉外担当者2名（Rachael Robinson氏、James Robinson氏）の3名であった。

## 4. 結 果

### 4-1 知的障害者のスポーツ支援活動について（Mathew氏による）

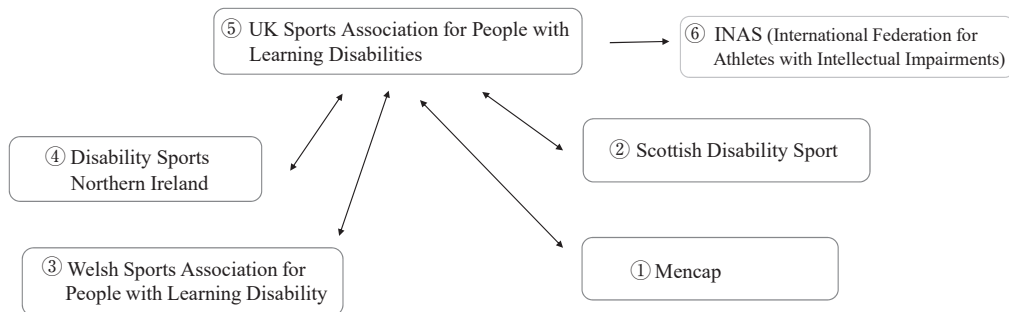
Mathew氏はMencap Sportsで知的障害者のエリートスポーツを担当しており、参加資格を踏まえて知的障害者を国際大会へ出場させるのが主な仕事である。

#### 4-1-1 Mencap Sportsの組織

Mencapの上部組織にUK Sports Association for People with Learning Disabilities（英国知的障害者スポーツ協会、以下UKSAと称する）があり、INASに対して英国を代表する組織である。Mencapはイングランドを担当する組織で、所属するメンバーをUKSAを通して国際大会に派遣している。同様の機能を持つ他3地域の組織とも密に連絡を取っている（図1）。

#### 4-1-2 エリートスポーツ活動

パラリンピックに採用されている知的障害競技種目である水泳、陸上の選手を主に派遣している。卓球もパラリンピック競技種目だが、英国はあまり強くないので選手は送っていない。INASの新しいクラスにII2とII3ができたが、派遣の中心はII1である（表1～3）。しかし、



注：全英4地区にそれぞれの知的障害者スポーツの支援組織がある。

①イングランド：Mencap, ②スコットランド：Scottish Disability Sport, ③ウェールズ：Welsh Sports Association for People with Learning Disability, ④北アイルランド：Disability Sports Northern Ireland.

これら4地区の組織を統括するのが、⑤UK Sports Association for People with Learning Disabilities (英国知的障害者スポーツ協会)である。

⑤は各地区から知的障害者スポーツのトップアスリートを集め、⑥INAS (International Federation for Athletes with Intellectual Impairments, 国際知的障害者スポーツ連盟)が主催する国際大会に選手を派遣する。

よりよい日常的な活動をするため、①～⑤の各組織は相互に情報交換をしている。

図1 イギリスの知的障害者スポーツ支援組織

表1 Intellectual Impairment 1 (II1 知的障害者)の資格基準<sup>4)</sup>

以下の3項目をすべて満たすこと。

- 1) 全検査IQスコアが75以下。
- 2) 適応行動(概念的・社会的・実用的な適応スキルによって表される)に明らかな制約がある。
- 3) 知的障害が、受胎から18歳までの発達期に明白に表れている。

表2 Intellectual Impairment 2 (II2 ダウン症候群：重篤な機能障害)の資格基準(暫定案)<sup>4)</sup>

WHOの定義では、ダウン症候群は21番染色体の遺伝物質の過剰により引き起こされる知的障害とされる。この定義に基づき、ダウン症候群を有する選手に関するINASの参加資格基準は以下のとおりとする。選手は条件1)および2)を満たす必要がある。

- 1) 正式にダウン症候群と診断されている。
- 2) ダウン症候群を有する人に多くみられる整形外科的問題である症候性環軸椎不安定症(AAI)を有していないのがはっきりしている。

著者注：モザイク型ダウン症候群の選手は、II1(知的障害)に移行した(2019年1月1日より)。

表3 Intellectual Impairment 3 (II3 自閉症スペクトラム障害)の資格基準(暫定案)<sup>4)</sup>

WHOの定義では、自閉症スペクトラム障害は複合的な脳発達障害群であり、この総称は自閉症、アスペルガー症候群などの疾患をその範囲に含む。これらの疾患は対人関係および意志交換が困難であること、興味と行動の範囲が狭く繰り返しがみられることを特徴とする。この定義に基づき、自閉症を有する選手に関するINASの参加資格基準は以下のとおりとする。選手は条件1)および2)を満たす必要がある。

- 1) 全検査IQスコアが75を超える、または知的障害の診断を受けていない。
- 2) 自閉症、自閉症スペクトラム障害、またはアスペルガー症候群の正式な診断を受けている。診断は、資格を満たす医師が確立された診断方法を用いて行ったものであること。

II2, II3の多くの選手は参加を希望している。リオデジャネイロパラリンピック大会には英国から身体障害者が260名、知的障害者が7名参加した。知的障害者は全体の3%くらいだが、7名中6名がメダルを獲得した。日本は水泳の津川卓也と幅跳びの山口光男がメダルを獲った<sup>註3)</sup>。選手の発掘や競技力向上のため、様々な国内競技団体と連携を取っている。選手個人とも直接やりとりを行っている。

#### 4-1-3 国内競技団体の問題点

UKSAとMencapは選手の競技力向上に熱心だが、各競技団体はそうではない。MencapはGBSO（スペシャルオリンピックス英国）とEnglish Learning sports disability Allianceとして連携を取っているが、英国ではSOIのコーチが「この選手はこのレベルでいい」として、競技性の高いレベルに挑戦させない傾向にある。そこそこのレベルでいいと思って熱心に指導しない。コーチにもっと高いレベルに選手を引き上げるように助言している。たとえば、健常者と一緒に週2、3日練習すればレベルが上がるが、国際試合に出るにはこのレベルより引き上げなければならない。パラリンピックの選手はSOIに興味がないし、SOIはパラリンピックに出場できる可能性があることを知らない。ここに大きなギャップがある。

#### 4-1-4 参加者を増やすこと

コーチたちには自分たちの競技スポーツ選手を増やすように助言している。自分自身（Mathew氏自身）がSEN（Special Educational Needs：障害の有無は問わず支援が必要な子ども）の学校に行き、生徒を集めてスポーツの指導を行い、適当な競技団体を紹介することもある。Mencapは、エリートスポーツだけでなく、多くの知的障害者が参加できるスポーツ関係のイベントも積極的に行っている。round the worldという企画があり、運動時間を距離に換算して世界一周ができるくらいの運動機会を持たせたいという趣旨で行われており、参加者の平均年齢は約40歳である。

### 4-2 性教育について（Rachael Robinson氏，James Robinson氏）

#### 4-2-1 英国人の知的障害者の「性」に関する考え方

英国では、「知的障害者に性的感情があるのか」と聞かれることが多い。このように一般の人は知的障害者をこどものように扱っている。学校での知的障害者への性教育はほとんどなされていないが、その必要がない、という考えが通底にある。

#### 4-2-2 Mencap の目的

単に男女の生物学的違いを教えるのではなく、知的障害者が恋愛対象者を探す機会はほとんどない状況をどのように改善したらいいのか、知的障害者が自分のセクシュアリティを理解できるようにするにはどうしたらいいのか、をテーマにあげている。

#### 4-2-3 Mencap の戦略

- スタッフの教育

スタッフが性教育にポリシーを持てるようにする（目的の共有化）。このMencapのオフィスで教育を受けたスタッフが地元のMencapのスタッフを対象に教えることができるように、ここで使ったツールを地元持ち帰って利用できるようにしている。490か所、6,000名の全国のスタッフが対象である。2019年の3月からはMencap以外の団体にも広げていき、性教育の必要性の声を広げていく。

- 特殊教育の教員との連携

現在小学校（4歳から11歳）では、人間関係（関係性）の指導は義務になっているが、性教育は11歳から、しかも義務になっていなかった。女子を性的に利用する事件はある。逆に性的加害者になることもある。それはインターネットの利用によって増えている。性的な利用だけでなく、知的障害者はお金や宿泊の提供を求められ、断れないことがある。性教育も含め、「上手に要求を断る方法」など社会生活技能を教えることも必要である。

教える内容だけでなく、どのように教えるかも問題である。知的障害者と健常者が一緒だと



図 2 Mencapにて(左2人目 Matthew Maguire氏, 右端 James Robinson氏, (Rachael氏は写真撮影時には仕事で外出))

理解度が違うので難しい。

2019年から学校での性教育が義務になるので、まず学校の先生から情報を集める。今も経験のある団体、たとえばロンドンの Family Planning Association とは情報のやり取りをしている。今後は、「人間関係」、「性的なこと」、「健康」の3つが、Mencap が SEN の学校にアウトリーチするポイントとなるだろう。

なお、Mencap の資金源は、募金と自治体に与えるサービスに対しての報酬が主なものである。

## 5. ま と め

英国における知的障害者スポーツと性教育の現状を Mencap の活動を中心に述べてきた。今回はスポーツに関して1名、性教育に関して2名の職員から情報を得たのであるが、いずれも20代から30代の青年であり、問題点の指摘も率直で、現状の改革の意欲にあふれていた。活動の成果を論じることのできる調査ではないので、安易な断言は避けるが、競技性の高い知的障害者スポーツにおいては、多くの知的障害者にスポーツを行う機会を提供し、その後どのような競技会に出場できる可能性があるのか、国際試合までを視野にいった、いわゆる pathway を明確にしている点は選手のモチベーションを上げるのに重要であろう。その一方でそのことを知らないコーチがいることも問題であるとインタビューの受け手は指摘している。また、性教育に関しては、英国の保守性があらわれているようである。そのような状況の中で、「知的障害者が恋愛対象者を探す機会はほとんどない状況をどのように改善したらいいのか」、「知的障害者が自分のセクシュアリティを理解できるようにするにはどうしたらいいのか」という問題設定は極めて实际的であろう。医学モデルを一旦背景に置いたこのテーマは、自身がおそらく性教育を受けたことのないスタッフの教育にとっても適切であろう。数年後の成果を期待したい。

### 注

注1) SOIは(Special Olympics International)は、オープン参加型の競技大会を開催し、知的障害者の競技参加および参加支援を主体としていることである。ウェブサイトは<https://www.specialolympics.org/>。

注2) INASは、知的障害者のための競技性の高いスポーツの団体であり、国際パラリンピック委員会のメンバーでもある。したがって、INAS主催の国際大会で好成績を収めたアスリートは、競技種目によってはパラリンピックの知的障害クラスに出場できる可能性がある。ウェブサイトは <https://inas.org/>。

注3) 実際は、リオパラリンピックの知的障害クラスでメダルを獲得したのは、水泳の津川卓也選手

(100m 背泳ぎ) と中島啓智選手 (200m 個人メドレー) がいずれも銅メダルで、山口光男選手 (走り幅跳び) は10位でメダルを獲得していない。

#### 引用文献

- 1) 谷口広明・古谷駿・斎藤利之・宮崎伸一 (2017) 知的障がい者アスリートにおけるパラリンピックの現状. 中央大学保健体育研究所紀要 第35号 137-145.
- 2) 笹川スポーツ財団編 (2017) 諸外国における障害者のスポーツ環境に関する調査 [英国, カナダ, オーストラリア] 報告書.
- 3) Mencap The voice of learning disability. <https://www.mencap.org.uk/>
- 4) The International Federation for Athletes with Intellectual Impairments. <https://inas.org/about-us/athlete-eligibility/about-eligible-groups>

なお, 引用文献にあるウェブサイトは, 2019年1月3日閲覧可能であった.